

保育所の保育士と保育を学ぶ学生における乳幼児の発達に対する認識

松山 郁夫*

Recognition of the Development for Infants of Childcare Workers in Child Care Centers and Students Learning Childcare Programs

Ikuo MATSUYAMA

【要約】本研究の目的は、保育所の保育士と保育を学ぶ学生における乳幼児の発達に対する認識について、比較検討することを通して、保育士における乳幼児の発達に対する認識を明らかにすることである。保育所の保育士と保育を学ぶ学生に対して、乳幼児の発達に対する関心の度合いを問う無記名方式の調査を実施した。保育士 110 名、保育を学ぶ学生 72 名の有効回答を分析した結果、保育士は保育を学ぶ学生よりも、対人コミュニケーション能力の育ち、自発性を高めること、母子関係を形成すること、身の周りの物について応じた使い方ができるようになること、生活のリズムを整えること、言語発達への支援をすることの 6 点を重視していることが示唆された。

【キーワード】 保育所の保育士、保育を学ぶ学生、乳幼児の発達

I はじめに

保育士には、専門職としての幅広い教育訓練において、専門的マネジメントが求められるようになってきた。それは、「保育士の専門性向上の仕組み作りと専門分野別研修が整備充実してきたことが影響している。特に重要なのが、専門性を高めていく教育訓練・能力開発である」（山本, 2021）。また、「保育者は、発達理論を正しく理解した上で、それぞれの段階の子供の特徴を把握する必要がある。そして、発達段階の特徴に相応しい保育環境を構成し、人間関係の発達を支援できる保育技術の習得が必要である」（小林, 2020）と言及されている。そのため、保育士には、専門的マネジメントと乳幼児の発達段階に関する高い専門性が求められている。したがって、乳幼児の発達に関する保育所の保育士への研修、及び保育を学ぶ学生への教育の充実が不可欠と言える。

平成 29 年に告示された保育所保育指針（厚生労働省, 2017）において、第 1 章総則に「子供が自発的・意欲的に関わられるような環境を構成し、子供の主体的な活動や子供相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」と記されている。保育所においては、乳幼児期にふさわしい体験が得られる保育を行うことが重視されている。「人間関係」の領域では、「自分の良さや特徴に気付く」と述べられている。したがって、乳幼児においては、「集団のなかにおいても、自分の思いや考えを大切にしつつ、自分の得意なことを生かし、発揮していくことが重要である」（明石, 2021）と主張されている。

乳幼児の発達を促すためには、遊びでの豊かな体験が必要である。遊びにおける充実した体験については、「子供に満足感を与え、自己肯定感を高め、物事に対する意欲の高まりに繋がる。それによって、

*佐賀大学教育学部

個々の子供及び周りの子供達の成長に繋がる。また、遊びを通して、他者との関わり、保育者との関わりにより、遊びの内容が深まっていったり、遊びという活動を展開させたりしていきながら成長が成り立っている」(松尾・阿南, 2021) と報告されている。

そのため、乳幼児の発達にとって、保育者が果たす役割は非常に大きい。保育者には、個々の発達の違いを理解しながら、興味や関心等のストレングスを捉えた上で、働きかけていくことが求められる。

「個々の家庭の違いを観察しながら何度も振り返り、子供の育ちに役立てる立場でなくてはならない。子供にとって安心の基地、心の居場所であることが必要である」(中山, 2019) と述べられていることから、保育は乳幼児にのみならず、その周囲のストレングスもすべて活用しながら行われる行為だと考えられる。

ストレングス視点については、以前よりソーシャルワークの領域で使われている。ストレングスを契機とした多様なゆらぎが創出される。これによって、「ストレングス視点に基づいた社会的つながりの構築がシステムの変革の起点となっていく」(直島, 2022) と論述されている。生活システムの変革を目指すソーシャルワークを用いることが求められる。したがって、保育において乳幼児の発達を促す上で、ストレングス視点を重視すべきと判断される。

保育所における保育士の乳幼児への働きかけが、その子の発達段階や興味・関心に応じたものであり、自発性や社会性を伸ばすものである必要がある。その際、言語を獲得した子供については、喋れるようになるというだけでなく、それに加えて「人との関わりや思考力、自我の確立、他者理解等、様々な発達上の重要な資質・能力の獲得につながる。言葉で自分の考えや思いを伝え、言葉を理解することで友達の考えや思いに気付き共感したり、違いに気付いたりして仲間関係が生まれ、協同的な活動を可能にする」(前田, 2020) と強調されている。保育における乳幼児の言語獲得と言語発達の促進を目指した保育における働きかけが不可欠であると考えられる。

以上のように、保育における乳幼児に対する支援については、多様な視点から論及されているが、乳幼児の健やかな発達を促すためには、乳幼児の発達段階だけでなく、乳幼児とその周囲の環境のストレングスを捉えた上で、それらを活用した支援が求められる。

以上のことから、特に、以前より日本の保育を担ってきた保育所、及び保育を学ぶ学生における乳幼児の発達に対する認識について、比較検討をすることで、保育士養成教育に必要な知見を得ることに繋がると考えられる。これにより得られた見解は、保育を学ぶ学生における専門教育の充実だけでなく、現職の保育所の保育士の研修内容を向上させていくための一助になるものと考えられる。したがって、本研究の目的は、保育所の保育士と保育を学ぶ学生における乳幼児の発達に対する認識について、比較検討することを通して、保育士における乳幼児の発達に対する認識を明らかにすること、及び保育士養成教育に必要な知見を得ることである。

II 方法

1. 調査対象と調査項目

本研究では、保育所の保育士、及び保育を学ぶ学生を対象として、乳幼児の発達に対する関心の度合いを問う、独自の質問を記載した質問紙調査票による無記名方式の調査を実施した。

調査対象は、保育所の保育士、及び四年制大学において保育を学ぶ学生とした。

調査対象である保育士への質問紙調査票については、合計 186 名から回収された。それらのうち、保育所において保育士として、0 歳児から 5 歳児に関わった期間が半年以上あり、且つ全質問項目に回答している 110 名の質問紙調査票を有効回答とし、分析対象とした(有効回答率 11.7%)。

回答者のプロフィールについては、保育所の保育士の場合、性別、年代、職種、保育に関わった年数、担当をしている乳幼児の年齢、保育を学ぶ学生の場合、性別、学年について質問をした。

分析対象者である保育所の保育士、及び保育を学ぶ学生のプロフィールは次の通りであった。

110名の保育士については、男性3名(2.7%)、女性107名(97.3%)、年代は20代22名(20.0%)、30代34名(30.9%)、40代23名(20.9%)、50代20名(18.2%)、60代以上11名(10.0%)、保育に関わった年数は0.5年から43年で、平均15.1年(標準偏差10.1)であった。

保育を学ぶ学生72名については、A県B市C大学において保育士と幼稚園教諭の取得を目指し、保育実習を経験している4年生とした。72名全員が女性であった。

2. 調査期間と調査方法

調査期間について、保育所110名の保育士は、令和4年11月20日から同年12月16日までとした。また、72名の保育を学ぶ学生は、令和4年5月とした。

調査方法は、次の通りであった。保育所の保育士については、系統抽出法による無作為抽出法とした。全国の保育施設がまとめられたホームページから抽出した各都道府県でのD番目に記載されている全47か所の認可保育所に、独自に作成した質問紙調査票を郵送にて各20部ずつ配布して回収する方法にて実施した。15か所(送付した保育所の32.0%)から回答が得られた。

保育を学ぶ学生については、A県B市C大学において保育士と幼稚園教諭の取得を目指し、保育実習を経験している4年生で、本研究の主旨を説明した上で、協力できると判断した学生に、無記名で独自に作成した質問紙調査票に回答してもらったところ、72名からの回答が得られた。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として次のことを行った。

質問紙調査票を郵送した保育所の所長及び保育士に対して、書面にて本研究の目的、内容、結果の公表方法、協力は任意であること、回答への記入は無記名方式で行うこと、回答は個人を特定できないようにすべて数値化して集計するため、保育所名は一切出ないこと等を説明し、同意を得られた場合のみ無記名方式の質問紙調査票への回答を依頼した。回答をもって承諾が得られたこととした。

保育を学ぶ学生への調査方法については、C大学において保育を学ぶ学生に本調査の目的を説明し、協力することを了承した学生に質問紙調査票を配布し、その場で回答してもらった。その際、倫理的配慮として、回答は個人を特定できないように数値化して集計すること、回答の協力は任意であること、及び回答への記入は無記名で行うこと等を説明し、同意を得られた学生のみに無記名方式の質問紙調査票を配布し、回答を求めた。

4. 調査項目の作成手順

子ども家庭支援論に関する3種類のテキストにおいて、乳幼児の発達と支援に関して記述してある文章(西田, 2019・高橋, 2020・原, 2019)を参考にして、質問項目を作成した。乳幼児の発達と支援についての基本的な用語や事項を使用して、質問項目を作成した結果、28項目になった。作成した28項目を3名の保育士に、保育所の保育士、及び保育を学ぶ学生に対する質問紙調査に使用できるかどうかを個別に尋ねたところ、3名共、28項目すべて使用できると回答をした。そのため、独自に作成した項目すべてを使用することにした。

保育における乳幼児の発達に対する関心の度合いを問う独自の28項目の質問項目における回答は、

「まったく関心がない」(1点)、「関心がない」(2点)、「どちらとも言えない」(3点)、「関心がある」(4点)、「かなり関心がある」(5点)までの5段階評価とした。記入の仕方については、各質問項目について、等間隔に並べた1から5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

5. 分析方法

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に、各質問項目の平均値について、保育所の保育士と保育を学ぶ学生の間でt検定を行った。統計処理には、IBM SPSS Statistics 22を使用した。

Ⅲ 結果

保育における乳幼児の発達に対する関心の度合いを問う独自の28項目の質問項目に関して、保育所の保育士、及び保育を学ぶ学生における各項目の平均値・標準偏差については、表1の通りであった。

保育所の保育士における平均値の最小値は3.55(「27.分類行動・カテゴリー名の表出を促す」、最大値は4.57(「24.コミュニケーションを楽しむ」)であった。全28項目中、3点台が6項目(21.4%)、4点台が22項目(78.6%)であった。

保育を学ぶ学生における平均値の最小値は3.17(「27.分類行動・カテゴリー名の表出を促す」、最大値は4.53(「24.コミュニケーションを楽しむ」)であった。全28項目中、3点台が17項目(60.7%)、4点台が11項目(39.3%)であった。

保育所の保育士と保育を学ぶ学生の間で、28項目の各質問項目の平均値について、t検定を行った結果、有意差が認められた項目は、「1.共感性・疎通性」、「3.行為による対話：やりとり・やりとり遊び」、「4.やりとり遊びを楽しめるようにする」、「5.状況を理解できるようにする」、「6.メリハリのある規則正しい生活を送る」、「7.できる範囲で、自発的に行動できるように働きかける」、「8.母親がわかる・人見知りをする」、「9.お気に入りの玩具ができる」、「10.目の前に物が見えなくても存在し続けていることを理解する」、「11.物を間接的手段、つまり道具として使うようになる」、「12.用途に合った物の扱いができるような働きかけをする」、「13.道具としての物の使い方ができるように働きかける」、「14.模倣ができるようにする」、「25.重度知的障害児の言語発達への支援」、「27.分類行動・カテゴリー名の表出を促す」の15項目(53.6%)であった。これらの平均値については、すべて保育所の保育士の方が保育を学ぶ学生よりも高かった(表1)。

その後、有意差が認められた15項目の意味内容をKJ法的手法で分類した。保育所の保育士は、保育を学ぶ学生よりも、乳幼児の発達に関して、対人コミュニケーション能力の育ち(「1.共感性・疎通性」、「3.行為による対話：やりとり・やりとり遊び」、「4.やりとり遊びを楽しめるようにする」、自発性を高めること(「5.状況を理解できるようにする」、「7.できる範囲で、自発的に行動できるように働きかける」、母子関係を形成すること(「8.母親がわかる・人見知りをする」、身の周りの物をその用途に応じた使い方ができるようになること(「9.お気に入りの玩具ができる」、「10.目の前に物が見えなくても存在し続けていることを理解する」、「11.物を間接的手段、つまり道具として使うようになる」、「12.用途に合った物の扱いができるような働きかけをする」、「13.道具としての物の使い方ができるように働きかける」、生活のリズムを整えること(「6.メリハリのある規則正しい生活を送る」、言語発達への支援をすること(「14.模倣ができるようにする」、「25.重度知的障害児の言語発達への支援」、「27.分類行動・カテゴリー名の表出を促す」)の6点について重視していると示唆された。

表1 保育所の保育士と保育を学ぶ学生における乳幼児の発達への関心の度合に対する各平均値・標準偏差・t値

質問項目	保育所の保育士		保育を学ぶ学生		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
1. 共感性・疎通性	4.26	0.54	3.43	0.67	8.03**
2. 他者と共感しながら、気持ちを通じ合わせる力を育てる	4.34	0.55	4.15	0.71	1.97 [†]
3. 行為による対話：やりとり・やりとり遊び	4.36	0.55	4.00	0.73	3.81**
4. やりとり遊びを楽しめるようにする	4.39	0.59	3.99	0.81	3.88**
5. 状況を理解できるようにする	4.13	0.61	3.74	0.79	3.58**
6. メリハリのある規則正しい生活を送る	4.15	0.69	3.60	0.76	5.00**
7. できる範囲で、自発的に行動できるように働きかける	4.37	0.56	4.01	0.85	3.45**
8. 母親がわかる・人見知りをする	4.21	0.59	3.57	0.82	5.72**
9. お気に入りの玩具ができる	4.07	0.59	3.76	0.99	2.40*
10. 目の前に物が見えなくても存在し続けていることを理解する	3.74	0.63	3.38	0.94	2.86**
11. 物を間接的手段、つまり道具として使うようになる	3.96	0.66	3.39	0.96	4.44**
12. 用途に合った物の扱い方ができるよう働きかけをする	4.06	0.69	3.40	0.90	5.29**
13. 道具としての物の使い方ができるように働きかける	4.06	0.68	3.47	0.80	5.15**
14. 模倣ができるようにする	4.25	0.67	3.93	0.92	2.50*
15. みたて・つもり遊びを楽しめるようにする	4.38	0.64	4.18	0.81	1.87 [†]
16. 身振りや仕草を理解して使う	4.15	0.62	4.08	0.87	0.60
17. 身振り言語を増やしていく	4.25	0.61	4.06	0.85	1.71 [†]
18. 指さしができるようにしていく	4.11	0.60	3.97	0.87	1.17
19. 言葉が遅い子供への働きかけ	4.40	0.62	4.31	0.80	0.89
20. 会話・遊びの主導権を子供に持たせる	4.20	0.66	4.15	0.88	0.39
21. 相手が始められるよう待ち時間を取る	3.90	0.66	3.76	0.96	1.05
22. 子供の発達レベルに合わせる	4.55	0.55	4.42	0.67	1.42
23. 子供のリズムに合わせる	4.34	0.60	4.33	0.69	0.03
24. コミュニケーションを楽しむ	4.57	0.53	4.53	0.65	0.49
25. 重度知的障害児の言語発達への支援	4.41	0.65	3.65	0.89	6.20**
26. 観察学習・模倣学習の促進	3.82	0.69	3.69	1.00	0.91
27. 分類行動・カテゴリー名の表出を促す	3.55	0.66	3.17	0.89	3.38**
28. ストレングス視点（興味・関心等）による支援	3.96	0.72	3.97	1.02	0.06

[†].05 < p < .10 *p < .05 **p < .01 保育所の保育士 n=110 保育を学ぶ学生 n=72

IV 考 察

保育所の保育士、及び保育を学ぶ学生における乳幼児の発達に対する関心の度合いを問う質問項目の多くが高い平均値を示した。したがって、保育所の保育士、及び保育を学ぶ学生は、乳幼児の発達に高い関心を持っていることが示された。特に、保育所の保育士においては、乳幼児の発達に対して、高い関心を持ちながら、日々働きかけている傾向にあると言える。

しかしながら、保育所の保育士、及び保育を学ぶ学生に関して、乳幼児の発達に対する関心の度合い

を問う質問項目中、15項目（53.6%）に有意差が認められ、全ての質問項目の平均値は、保育所の保育士の方が高かった。その項目から、保育所の保育士は、保育を学ぶ学生よりも、乳幼児の発達に関して、「他者とコミュニケーションをとること」、「自発性を高めること」、「母子関係を形成すること」、「身の周りの物について用途に応じた使い方ができるようになること」、「生活のリズムを整えること」、「言語発達への支援をすること」の6点について重視していることが示された。

保育という営みについて、子供と保育者の身体によるコミュニケーションが不可欠である。「保育者との非言語のコミュニケーションが、子供達のこの先の対人コミュニケーション能力の育ちに影響がある」（平松, 2019）。また、「保育者が直観的にコミュニケーション能力を低いと評価した子供は、使用した指標のいずれの項目に置いても低い水準で評価される」（樟本・岩立・西坂他, 2018）。さらに、子供の人間関係において、「根底に安全基地さえあれば、多くの経験を学びに変えていくことができる。そして、子供の中で学び、友達を思い遣ったり、時には我慢したり、約束したり、譲ったりできるようになる」（中山, 2019）と主張されている。つまり、保育所の保育士は、対象児の発達だけでなく、子供同士の関係性の形成も含めて捉える必要があると報告されている。これらのことから、保育士は、乳幼児のコミュニケーション能力を育てる際、対人コミュニケーション能力の育ちを重視しているものと考えられる。

保育所における遊びについては、「子供同士の主体的活動と同時に、保育者が環境を設定し保育上のねらいをもって指導する活動でもある」（鹿嶋, 2013）。「主体性の確立において、幼児期では、自発性の促進が大切である」（大元, 2015）。「自発性と主体性を重視した自然な遊びという形の方が、準備された運動プログラムの実施よりも、継続した運動習慣の獲得へと結びつく可能性が高い」（厚東・栗田, 2020）との見解がある。これらのことから、保育士は乳幼児の自由遊びを尊重することによって、自発性を高めることを目指しているものと推察される。

保育所で保育を受けている乳児について、家庭で母親に対するアタッチメントが比較的安定している乳児に限れば、「母親と保育士とで同じような行動を示し、保育士に対しても安定したアタッチメントを形成している」（近藤, 2007）。「乳児期に安定したアタッチメントを示すことができるように、皮膚感覚を通した、心地よい身体接触を受ける環境づくりが必要となる」（小島, 2017）と報告されている。このため、保育士は、皮膚感覚を通した、心地よい身体接触を受ける環境づくりを重視し、母子関係の形成に影響を及ぼす保育を心がけているものと判断される。

視覚機能、認知機能、運動機能は各機能と密接に相互作用しながら乳幼児の発達がなされることになる。そのため、乳幼児は「外的な情報を正確に獲得することで、自身の活動範囲内にある物体に対し、リーチやグラスプを正確に実行することができる。さらには、養育者とのアイコンタクトにおいても非常に重要であり、これによりコミュニケーションや言語の能力の発達に繋がる可能性が高い」（阿部・大塚・青木他, 2016）と強調されている。また、幼児におけるブロックを使った遊びを観察すると、「3歳児においても多くの見立てを行いやすくなり、自分がイメージした世界を、作品を動かし、時には音や台詞を付けるなどして表現することを楽しみ、結果としてごっこ遊びが多く発現することにつながった」（前・西館, 2020）と報告されている。これらのことから、保育士は、乳幼児が身の周りの物の用途に応じた使い方ができるようになることを重視しているものと考えられる。

生活のリズムを整えることについては、家庭教育の中心に位置づけられていると考えられる。なぜなら、教育基本法第10条において、「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする」と定められているからである。しかしながら、幼児期の家庭における生活においては、「保護者の生活効率と子供の基本的生活習慣の発達の双方を充実させるために、

多様な家族像や共働き家庭を前提とした、新たな幼児教育や家庭生活についての研究が必要である」(岩崎, 2021) と言及されている。つまり、現在の日本において、乳幼児の生活のリズムを整えるためには、家庭での取り組みだけでは不十分で、保育所等の保育の機能を高める必要がある。それ故、保育士は、乳幼児の生活のリズムを整えることを重視しているものと推測される。

人間におけるコミュニケーションの動機には、他者に知らせることと共有することがある。他者に正確に自分の意思や状況を知らせたいとき等、表情や身振りだけでは十分に伝わらないことがある。そのため、「正確に確実に知らせたいという動機から、人間は言語を作った」(水口・杉村, 2020) との見解がある。確かに言語獲得がなされれば、自分の意思や感情等を相手にわかるように伝えることができる。そのため、乳幼児に対して、その発達段階に応じた言語発達を支援する際、「日常生活や遊びの中で、各発達段階に応じた体験をできるだけ多く積むことができるような配慮が求められる」(松山, 2021)。また、保育者の問いかけが、子供の気づきや考えに関する言語化を促す言語活動の充実を支える保育者の言葉かけに、「問いかけるという関わりがあり、問いかけによって、子供は自分が気づいたことや考えたことを言語化しようとする。保育者は、子供の発言を受け入れる姿勢を持つことで、その子供らしい表現を受け入れる雰囲気につながる」(小木曾, 2022) と言及されている。これらのことから、保育所の保育士は、乳幼児の言語発達への支援をすることを重視していると判断される。

以上、保育を学ぶ学生との比較から、保育所の保育士は乳幼児の発達について、対人コミュニケーション能力の育ち、自発性を高めること、母子関係を形成すること、身の周りの物の用途について応じた使い方ができるようになること、生活のリズムを整えること、言語発達への支援をすることの6点を重視していると考察された。また、これら6点については保育士養成教育において学生が学ぶべき知識だと示唆された。今後の課題は、これまで検討した6点に関する乳幼児への保育を、さらに充実させるために必要な取り組みについて明らかにすることである。

V 結 論

本研究では、保育所の保育士と保育を学ぶ学生における乳幼児の発達に対する認識について、比較検討することを通して、保育士における乳幼児の発達に対する認識を明らかにすること、及び保育士養成教育に必要な知見を得ることを目的とした。保育所の保育士と保育を学ぶ学生に対して、無記名方式によって乳幼児の発達に対する関心の度合いを問う調査を実施した。有効回答を比較検討した結果、保育士は保育を学ぶ学生よりも、対人コミュニケーション能力の育ち、自発性を高めること、母子関係を形成すること、身の周りの物の用途について応じた使い方ができるようになること、生活のリズムを整えること、言語発達への支援をすることの6点を重視していること、及びこれら6点については保育士養成教育において学生が学ぶべき知識であることが示唆された。

謝 辞

本研究にご協力いただきました皆様に、深く感謝申し上げます。

引用文献

- 阿部和大・大塚恭平・青木義満・皆川泰代(2016) 目的指向運動における乳幼児の視線制御と微細運動：11ヶ月児と18ヶ月児の比較. 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究, 82, 17-35.
- 明石英子(2021) 遊びを通した子ども理解に関する一考察 ―領域「人間関係」と幼児期の終わりまでに

- 育って欲しい姿. 四天王寺大学紀要, 69, 445-459.
- 平松美由紀 (2019) 環境を通して行う保育に関する一考察—乳幼児に関わる保育者の人的環境としての役割—. 中国学園紀要, 18, 107-112.
- 岩崎香織 (2021) 幼児の基本的な生活習慣の発達: 首都圏 1 市の保育所調査から. 東京家政大学教職センター年報, 12, 67-77.
- 鹿嶋桃子 (2013) 自由遊びにみる子ども・保育者の相互作用と発達支援. 名寄市立大学紀要, 7, 27-35.
- 小林真 (2020) 乳幼児期の人間関係の発達. 富山大学人間発達科学部紀要, 15(1), 157-166.
- 樟本千里・岩立京子・西坂小百合・松井智子・岩立志津夫 (2018) 乳幼児期の発達や学びの評価の検討: 言葉の領域に焦点をあてて. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 24, 67-80.
- 厚東芳樹・栗田七奈美 (2020) 幼児の体力・運動能力に関する現状と課題, (30), 825-835.
- 小島賢子 (2017) 母子関係に関する文献レビュー—身体接触が及ぼす効果—. 大阪総合保育大学紀要, 11, 131-140.
- 近藤清美 (2007) 保育所児の保育士に対するアタッチメントの特徴: 母子関係と比較して. 北海道医療大学心理科学部研究紀要, 3, 13-23.
- 前祐希・西館有沙 (2020) ブロックを用いた幼児の一人遊びとその発達的变化: 幼稚園や保育所等にある玩具に着目して. 教育実践研究: 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 15, 57-68.
- 松山郁夫 (2021) 知的障害や発達障害のある子供の言語発達を促す支援. 佐賀大学教育学部研究論文集, 5(1), 143-153.
- 水口崇・杉村僚子 (2020) 自閉スペクトラム症の文化学習: 乳幼児期から児童期の認知と言語の発達理論から. 信州心理臨床紀要, 19, 147-159.
- 中山美佐 (2019) 乳幼児の発達と保育者のかかわりについて: 2 歳児事例・4 歳児事例からの考察. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 9, 263-268.
- 直島克樹 (2022) システムの変革を担うソーシャルワークの理論的枠組みへの考察—ミクロからマクロレベルの連動性とストレングス視点の結びつきに着目して—. 川崎医療福祉学会誌, 2(1), 31-47.
- 小木曾友則 (2022) 幼小接続期における幼児の言語活動の充実を支える保育者の役割—幼児の実態からクラス活動へつなぐ保育者の実践事例検討—. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部教職実践研究, 1, 67-74.
- 大元誠 (2015) 幼児教育と行動分析: 幼児の自発性の促進の観点. 佐賀大学教育実践研究, 32, 1-10.
- 松尾裕美・阿南寿美子 (2021) 乳幼児の発達を促す遊び—遊びの中で育まれる 10 の姿—. 福岡女学院大学紀要・人間関係学部編, 22, 13-19.
- 中山美佐 (2019) 乳幼児の発達と保育者のかかわりについて: 2 歳児事例・4 歳児事例からの考察. 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 9, 263-268.
- 厚生労働省 (2017) 保育所保育指針 (平成 29 年告示), フレーベル館.
- 前田綾子 (2020) 乳幼児が言葉をもつことの意味に関する一考察—保育所での長年の勤務経験を通して考えてきたこと—. 人間教育, 3(1), 1-5.
- 山本寛 (2021) 保育士の専門性・専門性意識と施設における専門性マネジメント. 青山経営論集, 56 (3), 21-41.